

一元化震源と構造の地域性を考慮した震源との比較（その2）

Unified hypocenters determined by JMA and their modification by introducing the local structures - 2

大井田 徹[1]; 青木 治三[1]; 山崎 文人[2]

Tooru Ooida[1]; Harumi Aoki[1]; Fumihito Yamazaki[2]

[1] 東濃地震科学研究所; [2] 名大・環境・地震火山センター

[1] TRIES; [2] Res. Ctr. Seismol. & Volcanol., Nagoya Univ.

<http://www.seis.nagoya-u.ac.jp/>

高感度地震観測網の整備・高密度化に伴い気象庁の一元化震源データの質は飛躍的に向上した。検知率に関しては2000年以降、特に顕著に向上している。一元化处理においては東北日本の海域など、地域の構造を考慮した走時データを使用することによって、その精度をあげている。しかし内陸部においては全国一律の走時データを使用しているため、地域によって異なる速度構造の不均質性は反映されない。今回は前回に引き続き、いくつかの地域における構造の地域性を考慮した震源再決定を行うことによって、得られた震源分布と一元化震源との比較検討をしたので報告する。今回とりあげる例は、志摩半島付近の震源分布、奥三河地方における震源分布などである。

全体として、これらの地域（中部地方）では一元化震源データに用いた速度構造モデルが、構造探査によって求められた速度構造よりも速くなっている。その結果、全体としては一元化震源が地域性を考慮した震源より深さが平均としては2～3km深く求められているが、深さの差は震源の深さによって系統的な差が存在し、深さ30km付近では場所によって4～5kmに達する。また、発震時と深さとがトレードオフの関係にあり、発震時にも系統的なずれが生じる。